

教育者研究会で学びました!

第54回教育者研究会は、「道徳教育の新たな充実をめざして」をテーマに岐阜県下5会場で行われました。もとす教育者道徳研究会は、7月28日(金)岐阜地区の羽島会場に参加しました。場所は、不二羽島文化センター。瑞穂市20名、本巣市1名、北方町5名が参加。道徳教科化を見据え研究意欲に満ちた大勢の参加となりました。とりわけ本田小学校からは、堀幸子校長先生をはじめ19名の先生が熱心に聴講されました。心より感謝申し上げます。

司会は、旧知の羽島市立小熊小学校・小川万里子教頭先生でした。

開会式では、国歌斉唱の後、岐阜県モラロジー協議会より教育者担当・小塚由紀則氏の開会挨拶、公益財団法人モラロジー研究所東海ブロック副部長・宮田敏子氏の主催者挨拶がありました。第1回の教育者研究会が瑞浪市で行われたこと、現在は全国各地90会場で開催されていること、参加者へのお礼や期待を、それぞれ述べられました。

また、開催地を代表しまして羽島市市長・松井聡様より、行政者として教育政策を率先して取り組んできた歩みと、現職の先生に向けた熱い思いを語るご挨拶がありました。



開会挨拶

小塚教育者担当



主催者挨拶

宮田副部長



来賓挨拶 (羽島市)

松井市長

平成29年度 研修内容

第1講「不易と流行」

羽島市教育長 伏屋 敬介 先生

「私たちはこの50年、人類がかつて経験をしたことのない変化の時代を生きて来ました」と、身の回りに起こった技術革新の成果を輝かしい「光」の部分として挙げられました。一方、時代の変化に巧くついて行けない不器用な人間の増加を「陰」の部分として対比されました。大切なものは教育、特に「心の教育」だと説かれました。

「明治・戦後・平成」三つの教育改革の中で「修身・特設道徳・特別の教科道徳」が担ってきた(いく)ことを強調されました。

「今こそ『少年よ、大志を抱け!』の精神で、明治や戦後の改革の時の人がそうであったように、困難な時代にこそ『志・目標』を持ち、閉塞感のある時代を切り開いていく人づくりが必要なのです」と。

変えてはならないものと変えなければいけないものを不易と流行というならば「人間の可能性を信じ、教育の可能性を信じ、不変の精進をする教師」の存在にこそ期待する伏屋先生なのであります。

教育実践発表

「心に響く道徳授業」

羽島市立福寿小学校 中川 広美 教諭

1年後に迫った小学校「特別の教科道徳」に向けて、低学年児童と真摯に取り組まれる中川先生の実践発表でした。今回の学習指導要領改訂の趣旨を的確に踏まえた内容は、現場の先生のやる気を喚起するものとなりました。



道徳の目的やねらいは従来通りで、内容がより体系的になったとし、方法は道徳性のより充実が求められているとの理解を示されました。方法の工夫として「読み物教材の登場人物への自我関与中心の学習」「問題解決的な学習」「道徳的行為に関する体験的な学習」の捉え方を話されました。テーマである「心に響く道徳授業」として、「人間理解→他者理解→価値理解→自己理解」と期待する児童の姿を明確にした展開を考えているそうです。『二わのことり』『ももいろのえさ』の実践は、参加者の共感を呼ぶ取組であることが伝わりました。

特に『ももいろのえさ』は、授業参観での保護者感想も紹介され、今後は親への働きかけも重要になることを示唆してくれました。

第2講

「育てよう子供の心、高めよう教師の心」 植草学園大学名誉教授、公益財団法人モラロジー 研究所教育者講師 野口 芳宏 先生

野口先生は、国語科専門ですが、ユニークな型にはまらない教育者でありました。過りは相手を思いやりながら「正すべきは正す」、全員が参加するよう質問をしながら、挙手の仕方等の学業指導も忘れません。教員は「研究（＝他者改善）と修養（＝自己改善）に努めなければならないのだが、研究は好きでも修養には熱心でない」と、心構えから発想の転換を鋭く迫られました。

「子供を良くするためには、自らを良くするための修養会こそ必要。普段から人格・品性を高めることに努めなければならないのです！」
「未熟を感じて学び続ける人を学者といいます。先生と呼ばれるよりも重みがあると思いませんか？『進みつつある教師のみ、人を教える権利あり』これは、私の大好きなドイツの学者の言葉です」

講義は、野口先生ご自身の成功・失敗体験を豊富に披露されながらQ&A方式で進められました。ユーモアたっぷりの語り口で、教師としての「資質・品性向上に大切な3つのこと」を示されました。



① **憧れもつこと。** 人生の師（匠）をもつことの大切さです。苦手な書を習おうとした時、師は「下手な者ほど巧くなる」と語って聞かせてくれたというお話が印象的でした。

② **本を読むこと。** 時間と空間を超えた師との出会いが書物であるとの考え方から、読書の重要性を説くお話でした。

③ **観を磨くこと。** 「観」は見方・考え方・感じ方の総称です。「道徳を学ぶというのは『観』を磨き合うことなのではないか」と、お話を聴きながら納得したものでした。

素敵な言葉もいただきました。「幸せの正体は、人から大事にされることにあるのではなくて、人を大事にできるところにこそある」いかなる時も主体的に捉える感性をもちたいと思いました。



熱心な会場の風景

結びに、3つの頭文字「あこがれ・ほん・かん」を取って終わられたのが、野口先生流の照れ隠しなのでしょうか…。



最後は、岐阜県教育者道徳研究会・河合宣昌副会長より、研究会の総括をしていただきました。講師三人の内容に触れながら丁寧なお礼を述べられました。結びは、野口講師の漢字教訓に習い「聞く→聴く・話す→語る」で道徳科の方向性を示していただきました。

閉会挨拶 河合副会長 当日の参加者人数は89名とお聞きしました。岐阜羽島モラロジー事務所、羽島市教育関係者の皆様、準備から後片付けまでお疲れ様でした。そして誠に有難うございました。

本会からの参加者に御援助いただきました岐阜もとすモラロジー事務所の皆様には、この場をお借りして厚く感謝申し上げます。

【文責・森山】